

麻生路郎★編輯

川  
の  
雅  
証  
物

武玉川新研究號

NO. X VOL. XIV

# 安産のために ワダカルシウム錠

なぜ

母体は

疲弊するか？

胎児の刷しいカルシウム要求と食物よりのカルシウム攝取不足は必然的に母体を疲弊に陥らしめ、妊娠中多発する母子体の諸種の疾病は實にかゝる所に重大原因をもつてゐる事は醫學界に認むる所である。

大阪帝大教授片瀨漢博士は多年之が研究に没頭され、母体のカルシウム攝取によつて妊娠分娩が安全に経過し、且授乳期に偶發する母子体の疾病を預防し乳質を可良ならしむる事を實驗されたがわがワダカルシウムこそは諸妊婦に必要不可欠の常備薬でなければならぬ。

榎林醫學博士 推奨

片瀨醫學博士 監査

妊娠の方へ急告

新案 特許 安産メーター進呈

正しい分娩日か一日で判る安産メーター及び大阪帝國大學教授醫學博士片瀨漢氏進呈安産のためにの冊子ハガキにて申越次第無代進呈

元 發 賣

大阪道修町 和田助商店



川柳雜誌 特輯十月號目次

選者と句主と解説者……………川村花菱……………(四)	慶紀逸の墓……………梅本秋濃屋……………(七)	武玉川漫談……………森 東魚……………(八)	紀逸小史……………麻生路郎……………(一〇)	武玉川三篇研究(十)……………梅本秋農屋 蛭子省二……………(一三)	秋蛙鳴く……………長 零 子……………(一三)	桃太郎繪卷さがし……………高尾亮雄……………(一三)	扉 擬武玉川調……………森 東魚……………(一)	近作柳檣……………麻生路郎選……………(一六)	川柳塔……………諸 家……………(一四)	一路集	庭下駄……………相元紋大選……………(三)	齒痛……………生田翠夢選……………(三)	各地柳壇……………(三五)	編輯縱横……………(四二)	社關係の人々……………(四四)	川・雜・案・内……………(四二)	川・協・の・頁	柳人素描……………(三〇)	(九) 阿部住保蘭君	(一〇) 西 いわを君	(一一) 矢野蛇の麿君	柳界展望……………(三一)	川柳書架……………(三〇)
----------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------	---------------------------------------	-------------------------	----------------------------	-----------------------------	-------------------------	----------------------	-----	-----------------------	----------------------	---------------	---------------	-----------------	------------------	---------	---------------	------------	-------------	-------------	---------------	---------------

酒

白鶴

清

ハクツル



元壹發

社會名合納嘉

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

# 誌 ♣ 雜 ♣ 柳 ♣ 川

號 十 第      卷 四 十 第

麻 生 葭 乃

チ、チ、チ、チ、チ、チ、殺す場面となる虫か  
水かれて枯れぬは棕櫚竹ばかりかは  
曲げぬ心が私のまことあなたへのプレゼント  
スリー・カッパス・オフ・ワイン惱み異なるくちにふれ  
ルビー・サファイヤ花のしめりに及ぶべき  
子等はみな星・月は冷えゆくものと知れ  
もつれし糸へ銚を入れず  
世は進化せりああ傀儡となりし我等



# 選者と句主と解説者

—「武玉川」の選者の句—

川 村 花 菱

「柳樽」が柄井川柳に由つて選ばれ、「武玉川」が慶紀逸に由つて選ばれ、兩々相對して共に川柳を學ぶものゝ片時も忘れてならない寶典である事は、今更此處に云ふだけの事もない。

二ツながら、多くの句主によつて詠まれた優秀な作品である事は勿論であるが、その句を選出して、兩者全く異つた藝術的境地を示した點について、我々は、選者の力を忘れる事も出来ないものである。

しかして猶、兩者共に、つけあいの前句をはぶいて猶獨立性あるものゝみを選んだものである事も、亦改めて云ふ必要はないが、これを選出する選者の態度は、單に十七字十四字の獨立した句を選出するものと、自ら異つてゐる點も考慮に入れなければならぬものである。

然し、「柳樽」、「武玉川」をひもとくもの、その内容が、つけ句の獨立したものであると否とにかゝはらず、そこに多くの秀逸を見

出すのは、今日の十七字的十四字的を、前句なしに詠み下すものと、そこに何等の變りもないものとして考へて差支ないと云つてゐる。そして、私は、それ丈優秀な句を選出し得た選者は、はたして句主としてどれ丈の力を持つて居るものと考へて見た。茲には「武玉川」のみについて云ふべきものとして、私は紀逸の句をよんで見た。

紀逸の句は、「武玉川」二篇の、卷末に百句だけついで居るが、試みにそれについて考へて見ただけでは、紀逸は作家としていさゝかも感心する所がない。その百句全部が、全くつまらないものであるとさへ斷ずる事に躊躇しない。

されど、選句に對する軸を考へる時に、選出された句のあまりにも美しいのに對して、選者の力量のあまりにも劣つて居る事に只々驚くより外にない。

勿論紀逸の句は、所謂川柳（今日で云ふ）的内容を扱つたのでなく、今日の云ふ俳句にすぎないものであるとは云へその一句にも、武玉川の句に似たものは愚か、その觀察、その作句の態度に於て、「武玉川」のほいだにかぐ事の出來ないのは、怎したものと怪しまれる。もし、「武玉川」に選ばれた句主がもし、紀逸の句を見たらば、そしてその句主が、現代に於けるが如き態度であつたらば、恐らくその一句をだに投ずる事を躊躇したらうとさへ思はれる。

夏 行 つ て 譽 め た る 所 皆 寒 し  
 正 直 の 種 を 植 る や 杉 の 苗  
 秋 ま で は 我 を 張 り 通 す 案 山 子 可 な  
 鬼 灯 や 人 は 口 か ら 年 が 寄 り

などに至つては、所謂月並の宗匠の句から一步をも出て居ない選者の心持の充分にうかゞはれるものではないか。恚した事を見て私は思ふ。慶紀逸は、極めて優秀な選者ではあつたが、決して作家ではなかつたのだ。それを考へると當時の選者と現代の選者との間に、全くちがつたものが横はつて居る事に氣がつくのだ。

現代の選者について考へて見れば、いづれも作家として信用され、愛好され、然も猶眞に自己の川柳を理解し得るものと他の作家から許されたものか、又はその作品のよさが、多くの同好者を自らあつめ擧げられて選者となつたものであるが、その選者に對して自句を投ずるものからすれば、その選者の好むところ、又はその選者が作家として常に見つめてゐる觀點に對して、同じ觀點のもとに作句したものであつて、廣い意味に於ける川柳としての價値を問はうとするの態度は尠いと云はなければならぬと思ふ。

従つて、路郎氏選ぶところのものは路郎氏の作品に類似のもの多く、三太郎氏に投ずるものは三太郎氏のねらひ所に似たるもの、水府氏に接するものは、水府氏の川柳觀に由つて詠まれたものが多いのは主催する川柳誌の句を見れば分るやうに、選者の態度いかんにかゝらず、それは自然の結果となつて現はれる。而してその恐るべき結果は、小路郎、小三太郎小水府を數多く作る丈のものとなる。(路郎曰く。小生は創刊以來、この事に言及し、小路郎を作らぬことを宣言し、作者自身を伸ばすための句をしてゐる事は周知の事實である。)

私は此點を考へて、即ち作家は作家として獨自の立場を守るべきもの、選者必ずしも作家である必要は更にないと思ふのである。

即ち、選者とは、平靜冷徹な態度を以つて、よく他人の作品を正しく鑑賞批判し、然して川柳者本來の藝術に對してあやまらざる判断を下すにあつて、然らば選者の句はと問はれても、一句を爲し得ないとしても何の恥辱でもないものであると思ふのだ。作家は只、自分の心の歌をうたふべきもので、作家としての尊敬を以つて、自ら選者の立場を野心する必要は少しもない。

自分は此の句が好きだ、と云ふ事と、

此の句はよい句だ、と云ふ事とは、自らちがふものである。まるでかけはなれた例であるが、名聲の高かつた拳闘選手のオールドタイマーは、必ずしもレフェリーとして凡てが立てるものではない。各レフェリーは、必ずしも現役中に優秀な選手であつたとも云へないのだ。それは行司と力士との關係の如く全く異つた出發をするものさへある。

作家選者の兼職をはなれ、いつか獨立した川柳のよき選者があらはれて來てもよいではないか。選者は指導者であるべきもので、自己の作風を提唱すべきものではない。

もう一つ、私は、正しき解説者をも求めるものだ。「解説者を殺す」の嘆を、私は一再ならず叫びつづけたが、自己の主觀にのみ照らして、川柳を解説する所に、常に川柳はあやまられて行く。

「武玉川」の選者慶紀逸の作品が、月並宗匠以外に出ないからと云つて、「武玉川」全體を否定する事が出来ないのはあまりにも明かな事であるが、私はそこに、作家對選者の問題について、大いに考へて見たいと思つたのである。

暑中、ぼんやりした頃で此の一文を書いた私は、これを以つて一つの文章と云ふものではない。只、私の一考案を發表して、問題を提出したにすぎないのだ。

# 慶紀逸の墓

秋 農 屋

慶紀逸といふ名は、『武玉川』に據つて、俳人よりも川柳人に汎く知られてゐるが、紀逸と稱した者は三人有つて、一世が慶氏で、二世は井上氏、三世は巻氏である。

一世慶氏の死歿したのは、諸書に寶歴十一年五月八日と有るが、之に一の疑問が有るので、夫れは「武玉川十五編」に「都枝折五編の卷末に、後宴狂歌として、紀逸外數名の狂歌が載せてあつて、其の終に「寶歴十一年巳九月吉日」と明記して有る事で、之れを見ると寶歴十一年の五月八日には、紀逸はまだ存命であつたと想はれる。牧野望東、星野麥人共著の『俳諧年表』に、「一説に寶歴二年歿」とあるが、之は「寶歴十二年歿」の誤謬であつて、十二年説が正確ではない歟大いに研鑽の餘地がある。

慶紀逸の墓は、墓辭家として有名な老樗軒（通稱伊勢屋平次郎）の著『墓所一覽』に、谷中立善寺とあるが、私の舊宅と此の寺とは一丁半程、現住宅とは四丁程の近距離であるに、是迄展墓する機會が無かつたところ、今回本誌で武玉川新研究號を發行されると云ふので、去る八月廿九日、立善寺へ調査に行つた。此の寺は山號を長興山といひ東京下谷區谷中茶屋町より、本郷區駒込團子坂に到る幹線道路の途中程より右折して、里俗六阿彌陀横町といふ細路を行くと、凡半丁程の東側で、其の表門は、瘡守稻荷のある大圓寺の裏門と斜に相對してゐるのであるが、刺を通して住職に面會なし、紀逸の墓碑の存否を尋問したところが、斯る墓碑は無いと答へたので、更に過去帳に就いて調査したけれども、紀逸に關する事項は發見しないのである。猶又過去帳に他の名にて記載してはない歟と、紀逸と同年月日に死歿した者を、仔細に調査したけれど遂に徒勞に歸した。上記の如き次第であるから、他日正確なる文書が發見されなければ、慶紀逸の墓碑を發見する手段は無い。前に書き漏したが、立善寺の有る所は、下谷區谷中三崎町十一番地である。岩本梓石、宮澤朱明共著の『新撰俳諧辭典』に、「谷中龍泉寺に葬る」とあるけれども、之れも誤謬であつて、龍泉寺といふのは、下谷龍泉寺町にあるが、谷中には無く、此の寺にも紀逸の墓は無からうと思ふ。

紀逸は狂歌をも詠むだが、『萬載狂歌集』の中に、彼の辭世が載せてある。

此の年に初めてお目に懸かるとは彌陀に向ひてまうしわけ無し

# 武玉川漫談

森 東 魚

私が初めて「武玉川」と云ふ本のある事を聞いたのは、嘗て一二度書いた事のある通り、小學校時代からの友達で、前川直太郎、柳號、「艶文字」からである。然し名を聞いたと云ふだけで、原本がどんなものか、どう云ふ本であるのか、一向顧みる気にもならなかつた——それは、明治末期で私は、日本派の俳句に傾倒し、明星派の和歌に心酔してゐた時代なのだから——けれど、前川が、自分の繪に添へて、書いてよこす武玉川の句は、何かなし、一陣の清風が吹き通るやうな、すが／＼しさを感ぜられた。

光るもの大宮人もほしがりて  
煙草屋になる氣で二人出代りぬ  
鎌倉にねはる枕のあらばこそ

などは、今だに忘れない。彼がかうして、私に武玉川を宣傳した、それが後年、私が川柳へ本格的に頭を突込むやうになつてから、どれ程いゝ影響を及ぼして居たか分らない、此の點私は常に感謝してゐる。思へば、彼は武玉川に限らず、色々な事を私に宣傳、——宣傳と云ふ字が全く適切と考へられる程、私に吹つ込んだものである。正宗白鳥の「泥人形」を讀んだか、谷崎の「刺青」を讀んだか、ゴーガン、やコッホを見たか、などと私を刺戟に來たのも彼で、私に常に新らしい視野を開いて呉れたものである。何しろ當時私は、小説と云へば、鏡花より讀まなかつたのだから——。

「武玉川」の選者、紀逸に關しては、島田筑波氏の「花束」誌上の記事に教へられる處が多く、其夜寒の碑は、松宇翁が芭蕉庵へ移られたお蔭で親しく見る機を得、久良伎翁から前以て其碑に就いて聞き、其の拓本を頂戴したのも忘れ得ぬ事である。

久良伎翁の女婿、内田月城さんの手に入るべき、武玉川の原本の三冊が、偶然私の手に落ちたのも嬉しい思出である。それは、本郷切通し上の永森と云ふ本屋であつた、月城さんが、豫めとつて置く様に云はれたのを、永森のかみさんが、あとから行つた私に知らずに賣渡してしまつたのである、然も格外に安かつた。それが後に、久良伎社の會合に話が出て、月城さんが愈々残念がられた事であつた。何か扉へでも、月城さんに記念に書いて貰つて置けばよかつたのに、と今更、月城さんの亡なられた今日、殘惜しく思はれる。

それから、舊久良伎翁藏書で、久良伎翁の筆で、題答に「武玉川」としてあるのが、事實は武玉川でない本がある。これはまだ私が何處へも發表しない大事なもので、時々一人で楽しんでゐる、もう少し獨で樂ませて貰ひ度い、何れは何かの機會に發表する考である。兎に角、秋の屋大人、蛭子省二さんのお骨折で、武玉川の三編までも通釋が出来た事は何としても難有い。

武玉川のよさは、何か、かう澄み渡つた所があつて、時代を超えて、近代人の感覺にも、鋭く響き來るものがあると私は思ふ。武玉川を熟讀し其よさを味つた後、復、柳樽へ立歸つて見ると、柳樽は、柳樽として又よい味の有る事が特に氣が付く様に私には感じられる。秋の屋翁、蛭子氏と共に及ばず乍ら努力して來た、武玉川輪講に就いては、もつと味ふやうにやれと云ふ忠告があつて、辭句の説明や難語の解に墮する事を難ぜられる聲も聞いたが、味ふべき足掛りには、これをやつて置かなければならぬから、出来るだけ努力してゐるのであつて味ふのは讀まれる方々が自ら味はつて下さればよいのだと思ふ。勿論手短かにさうした意圖の解も試みてはゐるつもりであり、現在やつて居る筈である。事のついでに一寸此の事も申添へて筆を措く事としたい。



源会より  
あはれ  
わらわ  
松

武玉川

## 紀逸小史

## 麻生路郎

柄井川柳も炭大祇も共に慶紀逸の門から出たやうに云はれしあるが、京に上るまで紀逸に師事してゐた大祇は兎も角として川柳がどの程度の師弟關係にあつたのか、それはハッキリしない。

☆

試みに西原柳雨の調製した川柳時代年表によるが、慶紀逸は元祿七戌年に生れ、柄井川柳は廿四年を隔て、享保三戌年に生れてゐる。

☆

慶紀逸が點者の列に加はつたのは享保十八丑年頃で柄井川柳の十六歳の時ださ記されてあるし、川柳が點者として聲名のあつた實暦七丑年には紀逸は既に六十四歳の高齢に達し、「武玉川」の十一編を成してゐるころを見れば、紀逸が旺んに行はれた頃に川柳が、その門を敲いたと云ふことはあり得る事だと云へる。が、併しそれらしい文献は見當らぬ。

☆

紀逸は江戸で生れてゐる。川柳も江戸で生れてゐる。紀逸の父は井伊侯の家臣である。川柳の父も寺侍の家に生れて後、町名主となつてゐる。紀逸は士人であつた關係から國字公、畫壽公、紀影子等の如き、當時の大名や旗本などの身分の重い人達が門人として名を列られてゐる。

川柳も又、彼の選句から類推して相當の有識者がその門に遊んだ事が判る。共に士人の出であり、共に點者として一見識を有してゐる點などを思考する時、この二人に何等かの連鎖が無かつたとは云ひ切れない殊に川柳點の前句附から吳陵軒可有が編纂した「柳樽」が、「武玉川」を選し書肆の需めに應じてこれを編纂した紀逸の例にならつてゐる點などを考へる時頗ぶる興趣が深い。

☆

紀逸が江戸座の判者として名を列したのには初老に近い頃で、下に掲げる「武玉川」九編の序文は彼の簡單な自叙傳として見る

ことが出来る。「我聞歌道は則身直路なり」と、その端くれのはいかないれば、なご到來のうすけにも至らざらんやと、餘以此山の端にかたぶき、入がたの月影に仇なるこの葉を捨ずひるひ侍る、予若年のむかし松月堂不角法橋は父の舊友なれば、これにたよりて五七五の文字を袖にかぞへて、麓の道に入り侍る、その頃は莫々たる柳塘のほそりに住て、風琴子白峰の文室にわづか五十歩を隔たれば、朝たゆふべに柴扉を推敲して、雪中庵の正意を尋ね、添削を請て三つ物に組む事十餘年也、頃しも紫野の隱士骨流堂敬雨、江府を旅寢の折から、靦面して翁のむかしを問もさめ、晋子の活法を探りて、交會度を重ね、湯元石霜庵にて終焉の砌迄、厚情かはる事なし、別號の硯田舎は、彼叟の銘せらるゝ所也、又一號四時庵は、天下翰林是に一篇の詩句をなし、序辭をそへ染筆して給りぬ、是を四時庵六物第一として、重寶ひめ置侍りぬ時に初老に近く、世に隨へる産行までもあらざれば、此道に入つて靜に生涯を息ふべしと、親し

き人々の異見に應じて、異意前の湖十法薬と成て、萬句興行の時、

からたちのみかたに厚き垣根哉 前湖十  
斯て江都判者の列席に加り、机上に句を  
わかつ事と成ぬ。(以下略) 倚柱子紀逸誌

この序文によつて、紀逸は早くから俳諧に親しみ、父の舊友立羽不角に就いて江戸座の俳諧の手ほどきをうけ、その住居が柳原にあつたので三田白峰といふ嵐雪系の宗匠の門をも敲き雪門の句風を味ひ、其角門の稻津祇空が江戸に來た時、親しくその教をうけ、それから祇空に師事し、享保十八年四月九日に祇空が病を獲たので、わざ／＼箱根の石霜庵まで出かけて看護につこめたま傳へられてゐる。祇空が世を去つたのは享保十八癸丑四月二十三日で、湯本の早雲寺にある宗祇法師の墓側に葬られてゐる。享年七十一歳。

☆

紀逸は寶曆十一辛巳五月八日に六十八歳で歿し、谷中初音町龍泉寺に葬られてゐる。とされてゐるが、今日もなほその墓石が存在するか、どうかは明らかでない。谷中初音町在住の梅本秋農屋翁に原稿を依頼したところが、残墓のきびしい中をわざ／＼道のため調査の勞を執られたのが別稿「慶紀逸の墓」で

あつて、谷中には龍泉寺はないといふこと  
下谷區谷中三崎町十一番地にあるのは立善寺であり、この立善寺に紀逸の墓碑がある  
とされてゐるので調査をしたが見當らなかつたこと、下谷龍泉寺は龍泉寺町にあるが紀逸の墓はこゝにはあるまいといふことである。自分も寸暇を得たら、紀逸の墓碑探しに東上したいと思つてゐるが、東京在住

紀逸の歿後、直系の門人から紀逸の名を繼ぐものが出ないで、二世の井上風也も三世の巻是非庵も共に湖十の門から出てゐるがその理由は不明である。

☆

### 擬武玉川調

森 東 魚

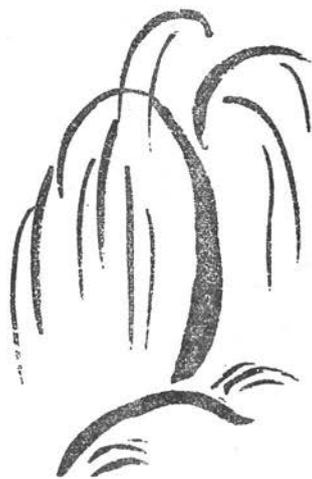
入 聲 の つ ま り く は ま だ 他 人  
嘘 した は づ み 句 案 を 取 り は づ し  
靴 音 も 秋 と な り た る 登  
自 剃 り の 顔 に 惡 念 は な し  
暫 く こ ろ す 堪 忍 の 息  
哀 れ さ の 青 龍 刀 に 銘 は な し  
降 參 の う た て や 飯 に む せ も し て

の川柳人によつて一日も早く墓碑を發見してもらひたいと思つてゐる。

☆

紀逸は慶氏。號としては硯田舎、自在庵倚柱子、四時庵、竹尊者、番流等がある。

「一武玉川」であるが、その外に「夜寒碑」「六物集」「黄昏日記」「雑話抄」等があるところであるが自分はまだすべてを讀破してゐない。



# 武玉川三編研究 (十)

梅本秋の屋  
 森 本 秋 の 屋  
 蛭 子 省 二 魚

(155) 野守の鷹の水底を飛ぶ

省二 謡曲の野守鏡に「昔この野に御狩のありしに、御鷹を失ひ給ひ、彼方此方を御尋ありしに、一人の野守参りあふ。翁は御鷹の行方や知りてありけるぞと問はせ給へば、かの翁申すやう。さん候これなる水の底にこそ御鷹の候へと申せば、何しに御鷹の水の底にあるべきぞと、狩人ばつと寄り見れば、げにも正しく水底に、あるよと見えて白斑の鷹、よく見れば木の下の水に映れる影なりけるぞや云々」。これは古歌と俗説で仕組まれた曲ではある。「野守の鏡鷹の眼で見附け出し」(古狂句)

秋の屋 此れは謡曲を採つたのであるが、「野守の鷹」といふと、野守の飼養する鷹と聞える。

東魚 前説につきる。

(156) 六日ほと人の心にあかれけり

省二 「六日」は原本の文字不明で、活字本は悉く「晦日」となつて居る。が、「六」らしいといふ事である。さて六日年越は俳諧にも詠まれて居る。「あかれけり」は、正月気分にもあいて、七日正月から働く心持ちに返えるとしても云ふのであらうか。「晦日」とすれば、晦日は關所として嫌やがられる事に關聯させて居ることとなる。

秋の屋 前説のやうにも解釋されるが、「ほど」が少し腑に落ちない。

東魚 どちらも原本の字が、何んともよみ難い。二本とも分らない。尚他書を見て調べる事にした。

(157) 行脚の夢の顔へふろしき

省二 布呂敷で顔を覆ふたまゝ、行脚の疲れで眠に入る。夢はどこを駈廻つて居る事やら。

秋の屋 夜中に蚊を防ぐとて、風呂敷で顔を覆ひ、蚊帳に代用するのである。

東魚 異議なし。

(158) 口留まして出す庵の小さかつき

省二 内密だ、人に話して下さるなど、口留をして酒になる。この小盃が珍物であつたりすると、話のはずむ縁となる。庵丈けに小盃である。

秋の屋 新尼の庵でもあつたらば、一層面白いと思ふ  
東魚 行ひすましてゐるやうな顔をしてゐて、案外浮世離れがしないのであらう。

(159) 夕顔咲て汁か喰れる

省二 夕顔が咲いた。やがて實を結むだ時には、汁にして味ひ得る。「夕顔は花計にて仕舞度」(高天鷲)

秋の屋 花より團子の類である。

東魚 夕顔の實を汁の實のあてにするのでは、わびしい生活が思ひやられる。

省二 農業学校の生徒が遊びに来て、その教科書を読み

ると、壺ひよん栽培の事も記してある。今日では大いに奨励もするのであらう。和漢三才圖會には、壺盧、彼岸中下種、立夏前後移種苗、五六月開正白花、日中凋、暮盛、故俗稱夕顔、結實有早晚二種、早者多結實而不久、晚者久結實而不多と。

(160) 身の代もつて這入る蓬生

省二 蓬などの生い茂る家をヨモツと云ふ。身賣金を懐にし、貧しい我が家に歸える。

秋の屋 浪人者のあばら家などで、孝行娘の身賣場で、演劇にしては既に陳腐だ。

東魚 芝居がかつた句だ。

(161) 寺にさへふせうくな午まつり

省二 寺の境内に稻荷様が祀つてある。初午となれば子供が集つてきたり、門前に乞食がうろついたりする。

『初午や表家とらるゝ寺も有』(蓼太) は、毎年の事なので、ふせうくな午祭をする。

秋の屋 住職の佛頂面が想像される。

東魚 「寺にさへ」と云ふのは、所々に午祭が行はれてゐる。ふせうくな寺にもあるとの心地で、ふせうくと云ふのは、外は随分盛だが寺のは型ばかりといふのであらう。

(162) 明後日とかるく請合ふ水淺黄

省 二 紺屋の明後日と云ふが、水淺黄だから、軽く必ず仕上げますと請合ふ。「あさつてと鸚鵡返しの水淺黄」(武十八)「水淺黄明後日といふ色でなし」(武十七)

秋の屋 句も亦軽い。

東 魚 前句の模様で「水淺黄」も、更に背けるところがあるのであらう。

(163) 赤蛙 國主の腹へ這入けり

省 二 赤蛙が小兒の疳の薬になる事は、初編「乳母の在所の赤蛙くる」で詳かなり。この句幼き「國主の腹」へ這入るところが焦點。果報な赤蛙だ。

秋の屋 「國主の腹」が如何にも奇抜だ。これが演劇ならば鶴千代君である。

東 魚 奇抜な句である。可笑味もある。

(164) 大黒の客い所をゑひす講

秋の屋 大黒天は蓄財をするから、客いといふのであらうが、それに反して夷講には、飲めや歌へで大散財をするのであらう。

東 魚 内々店の主人公が、客い人物なる事が、句はされてあるやうに思ふ。然し流石に夷講だけは著るといふ心

持。

省 二 夷講の盛況をよみたい爲に、一對とされて居る大黒天を持出したので、二編の發句には「大黒の身をうき草やゑびす講」など、同じ手法を見せて居る。

(165) 寄つてかゝつて憎む六波羅

秋の屋 前には平相國、後には常盤駿河守有名な赤面の敵役である。

東 魚 横暴に對する憤りである。句としては前句の響がなければ、あんまり曲がない。

省 二 古川柳側でも相國は、憎れ役に廻つて居るが、でも「始皇からみれば清盛小僧なり」などゝある。

(166) 座頭の口で止る賣居へ

秋の屋 「止まる」と「止める」とでは、その意が異なるがあの家は三代目で、店舗を賣拂ふさうだなどと世間に噂される故、それを打消す家に、平素出入の座頭の口を籍りて虚説であるといふ事を、觸れ歩かせると云ふの歎。

東 魚 座頭の口で、檢校から一時、金でも融通出來て賣居をやめたと云ふのではあるまいか。

省 二 座頭から借りたのではなからうか。

(167) 能い顔まさかしに出たる朝かす

省二「能い顔」とは、嫁さんの候補者ではなからうか。

秋の屋 朝霞といへば、長閑な日らしく思はれるが、仲の能い遊び友達を、物色するのでは無い歟。

東 魚 秀麗な富士山を暗にさしてゐるのではないか。朝霞に富士はみえるかなと、心當りを見渡す長閑な心持。それを前句の關係から、「能い顔」などと思はせ振りな、表現をしたのではなからうか。

(168) 死んで願いの叶ふ書置

省二「死ぬ程の仲とは親もしらま弓(武・五)死ぬ程なら話もつけてやるのとなつて、書置の條々が承認される。「願ひ」の一つには、同じ墓の下に埋めて下さいなどと認めてあつた事であらう。(思ひ募つての病死でもよからうが、自殺の方が強く感ぜられ適當である。)

秋の屋 病死者のは遺言状、自殺者のは書置と呼ばれたと思ふ。されば此の句は、情死者の書置らしい。

東 魚 世上まゝある事、書置説に賛。

(169) 及の笑ひのうまければ降

省二「及」はギフとよむ。妓夫がお世辭たつぷり、愛嬌笑ひなどする。流連の雨は降るのだ。

秋の屋 明朝は遣らずの雨でございませう、へ、へ、

などと世辭笑をするのである。

東 魚 一寸面白い、軽い可笑味がある。

(170) 帯といふものは日本の後ろつき

省二 前帯もあつたが、後帯こそ調和美がある。——わが女性が、お太鼓などを、背負つて居るのが、外國人には不思議でならぬといふ。日本趣味の後ろつきなのだからだ。だから帯は女の大財産でもある。

秋の屋 此の帯といふものに、高價の品を用ふるのは、日本人の外にはあるまい。

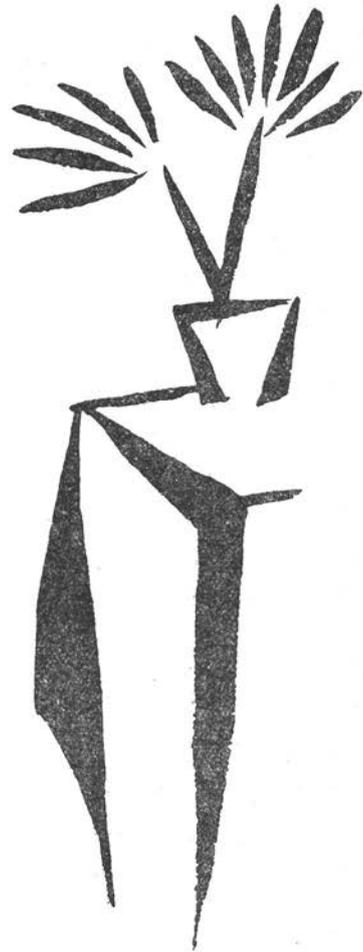
東 魚 「といふものは」と表現に、帯に對する自慢らしい心持がよく出てゐる。

前 號 (武玉川) 正誤表

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一六	下	九	と解釋	も
一七	上	一三	何人にあかれて	何んにあいて
一七	下	一一	厚本	原
一八	上	一二	剛飯	こはひる 剛飯
一九	上	一五	須臾	磨

# 樽柳作近

選郎路生麻



煙はもう秋の姿になびく山

長野縣

金井有爲郎

號外を手に死の易さおもふなり

同

田は黄金々々年貢を上げられる

同

内へ着く迄月給は手にありき

同

すり抜けてゆく風白し桑晶

同

木の葉みな散る相談をしてゐるね

同

雨は銀銀はつめたい女の瞳

同

腹匍へば疊の冷も秋のもの

尾崎

酒井斗風

信仰の母にさからふ日もありて

同

大阪の路地で故郷の水を戀ひ

同

日歩賃を借りて商賣とはさびし

同

糠雨の街なりへツト暗すぎる

同

眼を病みて黒き眼鏡よ秋ふかむ

同

貧途に個性をなくし使はれる

同



忌中明け河鹿が死んでゐたりけり

島根縣

田中都之介

定期券ごまかす顔と見えぬ髭

同

魚釣りへ入智慧をする宿浴衣

同

寝不足の眼で朝顔の垣へ立ち

同

號外が来て佛壇へ座る母

同

看板の裏でゴム毬腐りかけ

今治

月原 宵明

矯風會何ですつてと向き直り

同

蟹の威喝哀れ蹴られて如何にせん

同

一升買ひした頃話し夕餉食ふ

同

冷奴男は少し巻かれてゐ

同

悔帳紋附羽織土間にすり

同

パンザイの聲が終つて淋しまれ

大阪

石田 沐天

田園都市自給に足らぬものを植ゑ

兵庫縣

酒井美知夫

勇士爆笑駒の蹄も音高し

同

炎天の文化はじめなアスハルト

同

庭下駄で蟲のすだくを消してゆく

同

其他大勢の中に家出の娘がまじり

同

病室の窓シャボテンが子を生めり

尾崎

山田南濃路

煙突の影が長屋の先に伸び

同

置時計ほこりをのせたまゝ動き

同

無理やりに拜ませて居る初詣り

同

女ですものと妹が肩を持つ

同

白服のよごれ秋風吹いて來た

同

得能 紫浪

木瓜の花そろつてラヂオ體操する

大阪

正本 水客

里の子を思ふ夜長の硯箱

同

詰める丈つめて停電ですと云ふ

同

燭風機蜘蛛が巢をくむ待合所

同

夕立のなかを歸つて叱られる

同

子守して玩具が足らぬ妻の留守

同

ケーブルの一番前に立つ若さ

同

北川 春巢

大阪

今井 菊路

船の旅行 二句



燈臺の晝はこゝらの景になり	同	友達を夫を父を奪ふ支那	名古屋	稲垣	正穂
大時化に遭つたが後で自慢なり	同	廣告をかねた帽子で小僧来る	同	同	同
責任の轉稼なか／＼心得る	今治	ハイヤーの行く手遮る大掃除	大阪	馬淵	龍城
上の娘に壓倒される母である	同	物干で唄ふ子と居る夏の月	同	同	同
ついてながれる事勿れ主義	同	なきかづの母を見つけた水枕	愛媛縣	由利	孝輔
デカダンな帽子が母をくらくさせ	名古屋	スリツバの慣れない足に梯子段	同	同	同
お師匠はん雨の日足袋を脱いで来る	同	袂から出した賽錢見直され	愛媛縣	酒井	肱水
見て歸るダイヤ大きい寶石部	同	同胞は皆泣くだらう今日の記事	同	同	同
閑のある人と外交話しこみ	名古屋	その何が中毒したか折の中	奈良縣	嶋田	翠峯
請合つて來たを女房にたしなまれ	同	將軍も兵士も同じ貸浴衣	同	同	同
不景氣を知らぬのでなし門構	同	虫の聲秋ねと女黙つたり	大阪	秋山	古心
もう一度言つてみなと母きつい顔	東京	合歡木の下農夫薬罐の茶を啜り	同	同	同
まだ一人喰べぬ兒がゐてかたづかず	同	吠える犬黄色い聲になだめられ	大阪府	黒川	紫香
踏切の小屋だけの灯へ更けてゆき	同	騒がしに來た様蜂はついと逃げ	同	同	同
終點の車掌へ來てる請求書	大阪	妻なればこそ冠音へ戸を開ける	今治	長野	文庫
出雲屋の繪本がバスの忘れもの	同	厚司着て立身出世へまつしぐら	同	同	同
片戀のまゝに脚氣で歸される	同	親切も無視して盲道を替へ	九龍	馬場	浪二



手相見に尊い命あなどられ 同

賞められて沖へ一丁扱手見せ 大版 泉

濱茶店もうち細い秋を待ち 同

謹みて奉公袋洗ふなり 大版府 宮岡 公子

國防の婦人としての朝を行く 同

臨月へ一軒借りる工面に出 大版 米谷松太樓

あやす子へ父は漫画の顔になり 同

瀧道はこちらと書いて茶店あり 同 田中 風葉

叱られて泣きつゝも子は母へ行き 同

荷の軽さ叱られてゐる上得意 大版 加茂 柳扇

喫茶店風がクルく送られる 同

不機嫌な父へ皆なが口を閉じ 大版 丸尾美津枝

別れ行く裾へ芒がまとひ付き 同

御渡を割る往診のダツトサン 同 富本 無煙

それとなく不吉な夢へ電話する 同

今の世に生甲斐のある講義録 大版 岩橋 岩石

玉突で知つたに出會ふ喫茶店 同

頭からなめた言葉で壓せられ 同 松枝 静波

灸のあと誰はばからぬ丸裸 同

寝轉んだ鼻先へ蜘蛛下りて来る 同 澤井 香月

涼臺北支の話ばかりなり 同

萬年床ぬけて朝日へ背伸する 新京 千葉喜貫坊

神童のだんく乙が増えて行き 同

忘れ物あつて途中を引つ返へし 高松 楊 柳 夢

萬歳を浴びて戦士の汽車が出る 同

素顔にもなれず苦しさ續く夜 松本 山田 善弘

夢もなくたゞ猫と寝るひとり者 同

硝子戸の曇りしまゝで又産れ 同 名越 新華

一線を越えぬ木綿のつゝましさ 同

M君の武運長久を祈りつつ

戦地から葉書一枚來ずに秋 大版 山本 葉光

武運長久祈る 蔭 膳 同

全集の初巻ばかりがよごれてゐ 長野 佐二木千隈

撥砥も糸爪も無い妓がはやり 同



地にふれぬ儘遺品の下駄となり 大版 野本 香水  
 ボケツトの全財産が秋の音 同 綾田 三郎  
 言ふなりになるままごとの旦那様 今治  
 父を素通り泣いて這ふ臺所 同  
 木魚へふと冷たさを感じたり 愛媛縣 米澤 曉明  
 大臣の書あり眞偽を疑はれ 同  
 両親へ嘘の天罰雨に濡れ 下關 多田市他樓  
 貧しいがみんな丈夫な晩の膳 同  
 喧噪に言つてて存在認められ 松山 橋本 克海  
 當然の事も美談の中へ入れ 同  
 算盤が上手臨時の用が出来 廣松 藤牧 晤哉  
 聲出さず讀んで語學の大家なり 同  
 英字紙も千人針をカツトにし ハワイ 前山 北海  
 ピクニツクより献金へ氣が揃ひ 同  
 藝千匹女醫博をつくりあげ 豊中 金田 並木  
 体温計ようやく振れる力が出 同  
 賣られ行く西瓜車の座をころげ 大版 丸尾 潮花

口笛はいつか軍歌になつてゐた 朝鮮 弘津 慶一  
 歎提げて行けば蛙の逃る音 大版 西端 南天  
 助かれば狂言といふ目で見られ 長野縣 林 幹  
 ニューリス聴く額額の青い筋 布施 岡山 和夫  
 蚊張をとる妻は早くも薄化粧 大阪府 大島 石卿  
 小旗振る中に勇士の顔が見え 大版 毛利 稔幸  
 心得た番頭姿見て品を出し 大版 竹内 春坊  
 避暑などとボンと千圓涼しいね 下關 櫻川 不水  
 献納金我手離れて音を立て 大版 金丸 隼人  
 此處の風もつと休めと吹いてくれ 同 藤波南海男  
 我儘をとほす自信がくずれかけ 同 永並さいち

有爲郎君はホントに靜に世の中を眺めてゐる。「號外をが躍動してゐる。美知夫君の手に」の句は君としては樂に作つた句であらう。純情をそのまゝ表現した句である。「木の葉みな」は從來の君の畑の句であるが、「雨は銀」には一新境地を見出すことが出来る。都之介君の「嬌風會」を



本號の句は暑さのきびしい最中に詠まれたものであるだけに、作句に熱が足りないもつと強く、もつと鋭く見る必要がある。本欄の作家諸君は、形を整へるための推敲も必要には違ひないが、それよりもどんな内容を盛るか云ふことに苦心を拂つて欲しい。辭句の瓊瑤や手爾波の誤りなどは選句の際に訂正することも出来るが、内容の貧弱なのはどうにも出来ない。

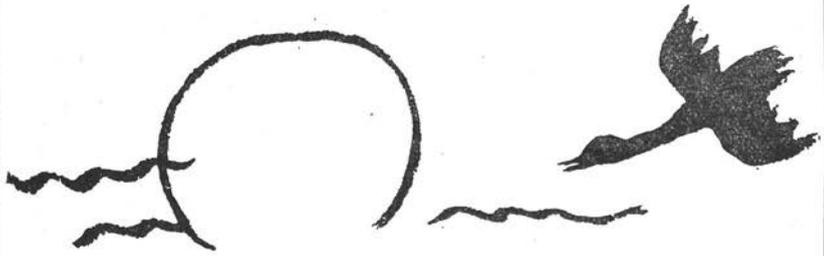
×

よかれ悪かれ特色を持つ作家は幸福である。さして難も無いが、何れも辛じてレベルに達してゐるといふ句の羅列には何れも抜くべきかに、かなり苦心さされる。極く小數の作家をのぞいては、何れも、一度はそんな立場に置かれるものであるが、それは精進の仕方によつて脱化し得られるものである。しかし中には随分長い間、そういふ境地で作句を續けて一向進境を示して呉れない作家もある。選者としては、こんな作家の句に對しては随分選句上の努力をささくけるが、これを救ふのはなかく困難である。云ふのは、こんな作家に限つて、相當の年月を作句して來てゐるので自分の句が拙いなどは夢にも考へない。従つて研究もしないで反つて選者の選句振を云々したがらるものである。作家として一番おそろしいことばあるところまで進んで、それから機械的の作句をつけ遂にはそこへ焦げついてしまふことである。(路)

# アサヒビール



大日本麥酒株式會社 内省御用達



# 秋 蛙 鳴 く

長 零 子

蛙が鳴く、秋の蛙が鳴く、蛙は春に限つて鳴くんじやないよ。秋だつてさびしければ啼くんだ、俺の住居はその昔、田圃だつたんだから、尙更鳴くのかもしれない。

小さい蛙、大きな蛙、澤山ゐるよ、おんぶしたり、キツスしたり、泥色のも、青いのも、鳴く時は西の方を向いてゐるやうだ。

彼等は雲を呼ぶのか、雨を呼ぶのか、その邊のことはしれない。

親分が鳴けば兒分も鳴く、蛙だつて群衆心裡は心得てゐる。そして彼等の安眠する巢はどこにあるのか判らない。土の上が巢なのか知らず可受さうに風邪を引くよ。

# 桃太郎繪巻物さざし

— 附たり人形ローマンス —

高尾亮雄

このごろ、ごなたかの桃太郎

に關する研究が本誌に載つてを  
りましたので大變興味をもつて  
讀みました。私もこの春、桃太  
郎銅像建設記念に「桃太郎さん  
展覧會」を大阪大丸で催しまし  
て、いろいろの好資料を得まし  
た。尤もことごとくは列べきれ  
ず、まだ未蒐集のものも澤山あ  
りましたが、大體およそ今わが  
國における桃太郎研究がどれほ  
どまで進んでゐるか、また桃太  
郎通の人々は誰々であるか、よ  
く判りました。この次ぎに展覧  
會をする時には、もつと面白い  
ものができるやうにと後世のた  
め記載だけは先つゝ残してを

きました。

それについて、一寸本誌を借  
りて好事家の方々にお頼み申す  
物搜しがあります。それはその  
桃太郎展の時に東京の久留嶋武  
彦氏の出品にかゝる頗る異様な  
桃太郎一代記の繪巻物が一卷あ  
りました、これは元々巖谷小波  
氏の手から譲られたものですが  
初めから上下二巻のものが欠け  
て上巻しかありません。ちよつ  
と鳥羽繪風の筆法で詞書も立派  
な書風、奥書きがありませんの  
で、年代もまた誰れの筆とも判  
然しません。たゞ一行ある俳句  
の下に「八集」とだけ記してあ  
りますから八集といふ俳人かと

も思はれますが、専門家に訊い  
ても名のある俳人にはそんな人  
はないと申しますし畫家にも見  
當りません。それはとも角さし  
て、その下巻の方が何人かの手  
に保存されてはしないか、若し  
あれば上下二巻の完全なものに  
したら桃太郎君も満足、筆者も  
浮かべれるさいふわけです。何  
かの縁で現はれぬとも限りませ  
んから心ある方々にお願ひいた  
します。その上巻は目下私の手  
もさにありますから何時でも御  
覽に入れられます。

さて、こんな雲をつかむやう  
な搜れものにも時には搜しあて  
る實例があつた事を一寸申しあ  
げてみたい。それは私がまだ大  
朝社にゐた頃、海外發展歴史展  
覽會を催しまして長崎や泉州堺  
の貿易に關するくさくさの貴重  
な参考品を集めました中に長崎  
の紅毛婦人の人形が一個トルコ

名譽領事の山田寅次郎さんのお  
宅から出品されました。するこ  
かれてから玩具蒐集家として有  
名な岸本五兵衛さんが、その片  
相手の男の方の人形をもつてを  
られて夫婦二人を一緒に揃へた  
いさ諸方苦心して搜してをられ  
たのが、圖らずもそれだつたの  
です。兩家においてはお互ひに  
喜ばれ、どちらからもその人形  
を弾にくれ、いや嫁にくれと相  
譲らず交渉が随分長引きました  
が、ある媒介者の盡力でさうと  
う黄道吉日を撰び、岸本家の方  
へ嫁入り、圓滿に治りましたが  
この夫婦相離れて國々に流浪す  
ること將に四五十年、漸く元の  
籍へ偕老同穴、ぼんさに面白い  
お伽ばなしになりませうな人形ロ  
ーマンスではありませぬか。

(九月三十日)





# 川柳塔

牛と牛とがつながりて行くやみ夜

大坂 橋本縁雨

雑魚とりの罐が錆びてる村の子よ

夕立をまつせんざいの廣さなり

軍服の子を探すのに手間がとれ

家内中掛かつて秋の硝子拭く

同 高橋かほる

洗面所小暗く光る金盥

齒醫者での餘裕往來見下ろされ

口入屋栗を食べては帳へ附け

★

目分量さても庖丁にさえた腕

大阪府

朝田新水

廓での女千人針に立ち

兵庫縣

水谷鮎美

いちどくの秋が来たぞと三味が鳴り

人影のさびしや風に消えにけり

煽風器顧客へむけて涼しがり

月窓にきて病人の眼が怖い

月給はあがらぬものときめて飲み

見覚えの鎖守の姿いなびかり

商賣繁昌勇士の母の襪がけ

交叉點馬も必死の眼をみはり

非常時と言はれて八百屋値切られる

生きて居た事に氣がつく彼岸が來

妹の勝氣が尻で風を切り

今日もぶひく日なり號外走る

寫眞機へこのまと云ふ臍を出し

未亡人釣られにかり厚化粧

よつこらしよどつこいしよと子と歩き

大阪

姫田夕鐘

大塚野

妹尾變人

收入は空瓶代とをんな文字  
 お寺はんのうしろへ子も来て座り  
 花嫁は七荷とやらで河馬に似る  
 兵役もなく千人針を小さく行き  
 夏も早や見切りの品に逝かんとす  
 お隣は西瓜を値切る暑さかな  
 冷房へ入り扇子のやりどころ  
 ウィンドの人形さんも旗を持ち  
 馬方と馬別々に支那へ征く  
 脂肪過多、男の世話になりません  
 鐵兜くにを流れてきた雲か  
 秋の雨しとゞ銃後の灯をいれる  
 郷愁もほのか撃つ身にしぐれゆく  
 つはものへ敵機か雁か秋惜む  
 丙種の身うとます内に闘ふ日  
 人の死を告げて提灯戻る路  
 石鹼に妻となる日をあかしたし

名古屋

吉田水車

大阪

須崎豆秋

松本

石曾根民郎

電氣時計のほしい日だ日曜日  
大阪 後藤青児

突堤の尖端に出る旗をふり

上海の事を思ふて跳ね起きる

勳章を出して明治の服になり

涼しさに髪を亂して朝を眠る

禁足の知らせは母の文字なるよ  
大阪府 宮岡白峯

夕刊の後から来る秋の風

イネ・トマト・銃後の妻の束髪よ  
広島 植山九天

皆分けて持つものがあり夜店の灯

故郷の驛くにのこゝろで虫が鳴く

玩具箱人形も午睡させられる

萬歳に辨當賣りの聲が消え

三十の戀に便箋など要らず  
大阪 中西おさむ

電線の雀が秋を構圖する

七回忌墓建てるのも待たず来る

お荷物を返し千人針の禮  
大阪 加藤ライト

打上げの花火へ星が残るなり

健康保険

掛金が馬鹿らしくなる健やかさ  
 呼鈴を氣強く押しした外交員  
 御近所を思ひラチオの音低し  
 御土産は青龍刀と元氣よく

廣島 島生古弗

知人戦死の報に接す

アルバムの寫真が君の形見なり

☆

女工だつてオムレッツ位こしらへる  
 お前丈夕陽の果てへ行つてくれ  
 二度棲か見おぼえのあるダツトサン  
 散歩しませうに娘油断せず  
 長屋ですお互ひに子を泣かせませう  
 蟋蟀が鳴くのので父の仕立物  
 後悔がおそいおそいと蛙鳴き  
 醫者かへた日が手おくれの日とはなり  
 ヒステリと言はれてつものるヒステリ

金澤 安川久留美

朝鮮 池田可智

春 秋 を う ち の 猫 か と 思 ふ 聲  
 何 時 頃 か ら か 叱 ら れ る 妻 と な り  
 算 盤 を ひ じ に 事 變 の 話 の み  
 旅 は よ し 郷 は な ほ よ し セ ル の 頃  
 年 訊 け ば 女 は 干 支 を 云 ふ た ざ り  
 抱 い た 兒 の 指 に 困 つ た 老 眼 鏡  
 幸 福 は 筆 筒 の 艶 を あ か ず 見 る  
 小 走 り に 寄 つ て 別 れ の さ や う な ら  
 そ の 中 で パ ン ク し た の が 靈 柩 車  
 誠 首 に さ れ た と 酔 つ て ゐ る な り  
 九 月 一 日 地 震 ど こ ろ か 誠 首 に な り  
 腹 の 立 つ 日 は 無 作 法 な 電 話 口  
 天 津 の 電 波 故 國 を 静 め さ せ  
 戦 線 の 夜 の ニ ュ ー ス へ 蟲 が 鳴 き  
 ポ ス タ ー の 如 し コ ッ プ の 泡 う れ し  
 た と 頼 る 注 射 の 針 へ 皆 ん な の 瞳  
 古 雜 誌 埃 た ゝ い て 讀 む と こ ろ

兵庫縣

長崎柳秀

今治

渡邊曉童

廣島

濱田久米雄

愛媛縣

今川椽影

# ★ 柳人素描

(九) 阿部佐保蘭君

曾つては川柳趣味の浴衣を賣出して川柳人のドギモを抜き近くは川柳翻譯研究会を興して一躍名聲を挙げた阿部佐保蘭君はその誕生記念に英



譯川柳入りの襟寸を、どうぞよろしくと配つた事ほど左様に抜目なく立ち働く自らサボランと號する所以かも知れない。生れは京都だが、何んでも思ひ立つたらやつてのければ氣のすまぬ性格に出来てゐる。それで川柳を作り出したのが昭和二年八月。

醉つた瞳へ妻の溜息突き當り  
長命は所詮出来ない馬鹿騒ぎ  
が君の句風である。

川・協の仕事はエスカレーターのように挽みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長がに御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで来たのも柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜ださ感激してゐる。 川柳人協會

## ☆左手のたより

の諸君で上等兵から少尉級ばかりである由  
▼石川縣羽咋郡の松本文太君、(霧の聲の著者)が入隊してから暫くして、大阪の天王寺から葉書を呉れた。是非會ひたいと思つたが、葉書には宿所も書いてなかつたし葉書を見たころには、もう大阪を立つたころだつた。それから一ヶ月ほどして上海の戦線で右手を負傷したので野戦病院にゐるが句は少しもつけない。毎日敵のこまばかり考へて、早く戦線に戻りたいと思つてゐると左手で書いたたよりをうけさつた。お互ひに川柳人は君の武運長久を遙かに祈らうではないか。川柳人で出征した人ばかり文太君だけでゐる。次ぎ／＼と召されて征く。一々それを詳記こそしないが感謝のこゝろで一べいだ。  
▼前田五健君から松山方面で川柳關係の應召者は  
新海素泉(松山) 石丸晴朗(松山)  
武智不由(松山) 濱住碌々(松山)  
片山絃月(今治)

# 川・柳・書・架

## 滿洲川柳句集

▼本句集の序の一節を抜く。  
「句の巧拙は十人十色で新進の中にも見逃せない佳吟が澤山ある。只純川柳を基調として統制ある滿洲の柳界であること、支那事變の眞只中に此の句集が生れ出たことを喜んで頂きたい」云々  
▼昭和十二年九月二十日發行、四六版洋裝函入、一七六頁、定價一圓廿錢。發行人高橋多佳次、編輯人湯本勇之助、發行所大連市能登町十番地大連川柳社。  
▼本句集はオール在滿川柳人の句集で句の巧拙は兎も角ローカル、カラーが出てゐて非常に興趣の深いものである。  
川柳 句集 南瓜の花  
▼本句集は渡邊晴童集、谷心府集、長野文庫集、石手向上庵集、石手河鹿集、月原宵明集の合纂で巻頭序文は酒井大樓君の筆。  
▼昭和十二年九月十日發行、菊半截、洋假裝、五二頁。編輯兼發行者月原勝明、發行所今治市寺町一三九番川柳雜誌社今治支部  
▼川柳雜誌社今治支部同人の熱の結晶である。

本名は潔志(きよし) 別號を櫻花洞、鶯谷、出生地は京都。現在は東京小石川區初音町で京染吳服白生地商を営んでゐる。川柳關係では川柳きやり吟社社人、川柳翻譯研究會理事長、川柳人協會理事

### (一〇) 西いわを君

西いわを君は一見、むつつりとしてゐて、それで相當に意見も吐く。幹事役を持つて行けば意外にテキハキさやつてのけるが、



それすらもあまり目立たない。趣味は讀書に登山だ。うだが、君が山に登つたさいふ話を聞いた事がない。すべてが地球好みなのだらう。川柳は昭和五年にはじめた。

疊ぼよよきものはなし寝轉げん  
變電所住宅は赤い花畑  
句も又地球だが、しつかりしたものを持つてゐる。

君の本名は岩雄。和歌山縣白濱温泉の

## 柳界展望

全國川柳界のこゝ、各地川柳人の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にした。皆様の御通信を歓迎する。

### 催

- ▼松坂屋百貨店の松坂俱樂部趣味道場で、「川柳路郎講座」が開講される、こゝになつた十一月の稽古日は第三土曜(二十日)と第四土曜(廿七日)で月謝は一ヶ月金貳圓
- ▼松坂俱樂部趣味道場では十月十六日午後六時から路郎川柳味座談會が開催された。出席者は麻生路郎、長崎柳秀博士、舞踊家西崎綠嬢、西崎博士夫人、西田紳樂氏、川出美根子氏、志村政之氏、岩崎修氏の八人で頗ぶる和やかな座談會であつた。
- ▼阪大川柳會九月例會は二十二日夕刻より大阪警察病院に於て、同病院長に就任された井上湧三博士の祝賀歡送會として開催された。路郎氏出席。
- ▼川雜松江支部、松江番僉會、松愛川柳會の主催にて九月二十三日來迎寺

句あり



「天來で治つた話リウマチス」  
「肩のこり母天來を離さない」  
又「強打者へ母天來をはつてやる」

- ▽肩のこり
- ▽手足の痛み
- ▽神経痛
- ▽リウマチス
- ▽肋膜痛
- ▽運動の前後に

絶対かぶれぬ、スグさく

白色の『天來』が一等  
鎮痛膏

▽價 二十錢 五十錢 一圓

左記にて試用品を無代進呈す

(大阪市東區淡路町三 船場ビル)  
發賣元 松井啓商會

産。職業は會社員、大阪市東成區南生野町に居住。川柳雜誌社不朽會會員。川柳雜誌社御池橋支部幹事、川柳人協會評議員。

(一一) 矢野虹の麿君

矢野虹の麿君の雅號は英語のアブノーマルの當て字らしいが、漢字の麿からうける力の方が強い。そして、いかにも麿然とした貴公子であるのうれしい。な



かゝの多趣味家でテニスレコード酒、釣、山獵等々

々。これではたさへ無職であつても随分さ忙しからう。川柳をはじめたのは昭和十年四月で、既自選句集の一冊もある。子は庭に妻は厨に日本晴  
三人の話二人になつて嘘  
の句がある。本名は公美(きみよし)、別號を瑛子さいふ。愛媛縣越智郡波止濱町の産、今は松山市外道後に居を構えてゐる。みすか川柳社同人、川柳人協會評議員。

に於て柳翁忌をいと名なる。

▼京都柳壇川柳忌句會は九月二十三日京都川柳聯盟主催のもさに四條繩手東仲源寺に於て修營さる。

消 息

▼中辻冬扇君(大阪)の令聞は九月六日心臓病のため尼崎阪本病院へ入院された。

▲濱田久米雄君(廣島)は鐵道局の雜誌「ひるしま」に「川柳に見る銃後のこゝろ」を執筆された。

▼石曾根民郎君(松本)は「川柳しなの」にどこまでも郷土愛を結び付けんとしてゐられる。目下松本一圓にわたたり一九の事蹟を調査されてゐる由。

▼八月廿二日附の手紙で北支張家口の岩崎柳路君から七月十八日淺源へ避難したとの報せがあつたので、漸く安堵した。内蒙古を參拾齋のバス進行は有史以來始めてである。家財を預して避難されてゐる柳路君夫妻に衷心御同情申し上げる。一日も早く張家口へ再歸せらるゝ日を共々に期待して止まぬ次第である。

▼中澤濁水君(高知)は九月六日限り帆傘を退かれた。高知柳壇は依然受け持つてゐら

れる由。

▼淺源へ避難された岩崎柳路君(北支)から九月「一四ヒアジチヨカコウエカエリタイワ」の打電があつた。萬歳!

▼朝田新水君(大阪府)は事變以後商賣の方が忙しく、蒐集趣味もそつちのので働いてゐられるとか

▼安川久留美君(金澤)は八月中旬より二週間ばかり病臥された。聞けば酒と葷の代用に甘いものがすぎた胃腸病。

▼金田並木君(大阪)は病院内でプーチやんのニツクネームを頂戴してゐられる。退院も近からうとの吉報に接した。

▼鳥生古弗君(廣島)は神經衰弱のため居を閑静な地に移され靜養中。

▼近江膳所の金波樓から艸樂氏(大阪)夫妻の便りがあつた。「あの時の座敷は湖水に面したやゝ大きい部屋でした。その思出がはつきり蘇ります。あの時も湖水に満月が映じて美しかったです」と齋藤松愨、麻生路郎兩氏と共に遊んだ二十年昔の金波樓道憶が艸樂君を君がへらした。

▼渡邊曉童君(今治)は九月九日伊豫貯蓄金治支店に勤務された。(三四頁中段へ續く)

庭下駄を履いて石から褒め初め  
 庭下駄が干されて夏の陽がま  
 庭下駄で稻荷参りもありがたし  
 庭下駄をこらひかしたハーモニカ  
 庭下駄へ社を退くとも云ひそびれ  
 庭下駄の温もり父が今はいて  
 庭下駄の重み感じて夏の去り  
 庭下駄で我家の空の星のかづ  
 庭下駄で夕立のあと見て廻り  
 庭下駄で押ピン探して乾事  
 好い月夜庭下駄履いた瘡上り  
 庭下駄をつまげブラリ出る暑さ  
 庭下駄のないのを犬のせいにする  
 買物に出るに庭下駄だけでど  
 庭下駄がきちんと揃う寂か  
 庭下駄を履くと植木にさぼりたし

龍城 斗風 紫浪 南海男 新水 静波 天作 紫花 南渡路 無煙 松大樓 浮草 南天 市他樓 心府 春巢

朝露に庭下駄が心よく濡れてゆく  
 庭下駄が二足並んで平和なる  
 焦燥がいつしか庭下駄はいてる  
 好い氣持庭下駄さう面に並びあり  
 燈籠を賛めて庭下駄はかされる  
 庭下駄で非番の父は涼しさう  
 十六貫乗せた庭下駄ゆき行く  
 庭下駄が抵當になつ土を踏む  
 庭下駄に汗を感じて良い話  
 庭下駄へ任意出頭届けられ  
 庭下駄に安心をして虫が鳴く  
 庭下駄の同じ大きさ並ぶなり

葉留路 同 佛心 潮花 同 呑水 同 曉童 同 五屬子 同

庭下駄がふむ砂の音旅の音  
 庭下駄は雨にうたれたま乾き  
 ひぐらしをこる庭下駄が音を立て  
 庭下駄でお稻荷をに燈を入れる  
 庭下駄をはいて債權者の立場  
 庭下駄の音のかるさの許嫁  
 庭下駄が並ぶ湯殿の旅ばなし  
 庭下駄の鼻緒のかたき旅と知る  
 朝顔の向きを庭下駄變へに降り  
 庭下駄のせはしさ犬にけつま  
 庭下駄に昔は土俵踏んだ人  
 庭下駄を揃へてあがる主人なり  
 庭下駄で歳より派手な浴衣を着  
 庭下駄で錦魚に物を云ふ如し  
 日一日庭下駄輕し恢復期

水客 同 美知夫 同 鮎美 同 由布 同 ライト 同 葉光 同 文庫 同



# 庭下駄 一路集

纂集句

## 齒

## 痛

## 生田翠夢選

春巢

真夜中の静かな中に齒痛ゐる

文庫

神経をぬくと齒痛は嚇かされ

葉留路

口一杯あけて齒醫者にまかす  
泣きながら泣き齒醫者へ連れられる  
シミズのまゝで齒痛を見舞はれる  
齒の痛み電車を一つやりすこ  
此の深夜齒痛の呪ひ教へられ  
子の齒痛母ねむられぬ夜の街  
この齒痛止む御醫者はまだ遠い  
癩癩を起して齒痛苦りきり  
齒が痛い夜を留守番たのまれ  
兎も角もゆけと進め齒の治療  
齒醫者からけりりと齒痛歸こ來  
一錢をやつても取ら子子の齒痛  
先生へ齒痛を他の子が告げる  
今治水結局醫者に診て貰ひ  
腹へつて益々齒痛きつうなり  
癩癩も父に似てゐる齒痛の子  
齒痛の子入齒の先客まつてり

住 吟

香 水 潮 花 同 曉 童 南海男 五扇子 松大樓 静 波 水 客 謙 南坊 心 府 市 他樓 由 布 ライト 春 巢 葉 光 同 五扇子 鮎 美 龍 城 新 水

齒の痛み鐘の餘りがまだ聞え  
曉 童  
齒痛もう止めて喫茶の椅子にゐる  
拙 吟

(三二頁よりの續き)

▼川維廣島支部は皇軍の武運長久を祈り殿島神社へ吟行。

▼辻遊歩君(兵庫縣)の令閉は去る九月七日午前零時三十分申出度男子出生靖裕と名命された由御祝ひ申上げる。

轉 居

▼大橋菜月君(大阪市住吉區田邊東ノ町八丁目二四ノ一但大鐵針中野驛西二丁)▼藤島茶六君(東京市蒲田區女塚町二一九)▼鳥生古弗君(廣島市小町三一岡田キミヨ樓内)▼姫田夕鐘君(大阪府大正區小林町三六)▼山本雨迷君(大阪府泉北郡濱寺町下石津八五)

改 號

▼飯尾紫浪君(尼崎)は寄與史を改號された

正 誤

▼前號 三十四頁 下段 二行目、三十五頁 上段 十六行目 美和夫は美知夫

なんでもクツク

金拾錢ヨリ拾五圓マデ

政 府 登 録

ベニヤ糊

本 舗

木。竹。カラス。石。セトモノ等  
全國各百貨店。文具店。藥局ニアリ

南 場 龜 三 商 店

大 阪 市 順 慶 町 通 一 丁 目

電 話 館 場 三 五 八 七 番  
電 話 館 場 七 五 五 番

いのちあるを創れ

# 各地柳壇

投稿清規

- 一、用紙は原稿用紙又は投句鐘の事
- 二、文字を正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

## 川柳雜誌主催 川柳忌

九月十八日 於 誓得寺

兼題 故人(東魚選) 袋(紳樂選)  
席題 靴墨(互選) 馬(可宵選)

願動(變人選) 油虫(白峯選)

各地柳壇

酒ぐせは 承知故人の無二の友 可宵  
 秋風が故人の言葉もつて来る 小柳子  
 佛間の燈 故人に威歴感じたり 鮎美  
 遣作展ダリヤがひさつ紅かりき 葉平  
 故人とはなりぬ君さば同じ趣味 ライト

次々に故人となりし群にゐる  
 下女からも故人の徳を聞かされる  
 故人とは別な馴染で座に交り  
 話ふと故人にふれて虫が鳴き  
 筆跡に故人を偲ぶ床になり  
 いつしかに酒は故人を語り出し  
 (人)唯一人故人の意志に氣をかねる  
 (地)この土地も故人の買つたものと聞き  
 (天)弱點も故人さなりし懐しさ  
 (軸)死んださは思えぬ寫眞笑つて居  
 菓子袋少なくなつて引きさかれ  
 男手の慰問袋がやつと出来  
 遠足の會費の音のする袋  
 放馬 同紫 同人 同變 同人 可宵 風葉 變人 東魚 放馬 潮花  
 かほる

病妻の夢に袋が縫へてみた  
 紙袋豆もあがつたかさになり  
 手品師の袋の底をちつと見る  
 隅へ来て紙袋とれた猫の顔  
 茶袋のその形式に叩く丈の  
 しはくちやの袋でおやつ貰つて来  
 慰問袋 銃後の熱の嵩と成り  
 安っぽい袋の薬よ う効いて  
 サラリーの袋の軽さ笑ひ合ひ  
 (五客)

子の菓子の袋叩きが仕舞なり  
 大黒様の袋を子供信じ切り  
 袋から袋へ米のチトこぼれ  
 十二月勘定袋へ淋しい眼  
 袋貼る銃後の妻のくちびるよ  
 (人)紙袋廻轉焼の湯氣が立ち  
 (地)味噌汁のほひへ袋貼り續け  
 妻らしくて妻靴墨をおこたらず  
 妻らしくなり靴墨の名も解り  
 靴墨がすばらしくなる頃さなり  
 靴墨がある 獨身の事務机  
 墨でもまげると靴の値が出来る  
 下駄箱(靴墨ボイと)投げ込まれ  
 靴墨が又一つ 入る靴を買ひ  
 靴墨をぬつて蚊が来るなと思ひ  
 靴墨をぬつて不平の日向ぼこ  
 魚屋の靴靴墨はいらぬなり  
 獨身の哀れ靴墨にもよこれ  
 靴墨に廻はる齒ブラシ哀れなり  
 東魚 小柳子 放馬 松太樓 白峯 ライト 白峯 不角 可宵 可宵 岩石 十九緒 紳樂 放馬 同鮎美 同東魚 同





涼しい風が枕をかるくしてゐる  
山の水響氣をおびてくる夜也  
踊る兒  
鮎美

清瀧吟行

水谷鮎美報

清流へ君の眼鏡の涼しいね  
踊る兒  
鮎美  
溪の風鮎捕る人と話こみ  
貸浴衣かぢかは何處かなとかいみ  
同 鮎美

淡路岩屋吟行

ろくきんご報

道白るへ島の娘とまた出合ひ  
踊る兒  
美  
ビールビール島が二つに見へばぢめ鮎  
波靜か繪島に船がかくれゆく  
同 美

阪大川柳會例會 (大阪)

丸島利生報

八月廿三日  
天の川、ニキビ、雜吟、歸朝  
上下の見わけもつかず天の川  
柳 秀  
天の川ひでり續きの村に訝え  
同 秀  
里子ある村へ流るゝ天の川  
同 秀  
戀の窓來る人遅し天の川  
同 秀  
てすりから落ちそうに見る天の川  
同 秀  
モウ秋だんなさ天の川眺められ  
同 秀  
看病の夜更げを天の川は訝え  
同 秀  
灰皿の汚れへ天の川は更け  
同 秀  
荒海の匂も偲ばれて佐波の空  
同 秀  
涼臺大の字の瞳へ天の川  
同 秀  
切れ話更けて行くなり天の川  
同 秀  
天の川ビルからビルをつなぐやう  
同 秀  
空襲はもう天の川横切りて  
同 秀  
戀人の指にさゝられて天の川  
同 秀

天の川にかゝわりもなく夜なべする  
路 生  
天の川泊るときめて欄に立ち  
同 生  
銀河渺茫小さき我を思ふ宵  
同 生  
一べんもニキビを出さず肺を病み  
同 生  
ニキビ潰すことも日課の一つなり  
同 生  
中年になつてニキビがうらやまれ  
同 生  
郷關を出てニキビ増え學成らず  
同 生  
中學を出て美顔水もつけてみる  
同 生  
散髪屋ニキビの顔へそつとある  
同 生  
ニキビ潰して戀の行衛を考へる  
同 生  
看護婦のニキビ小さく貼つてあり  
同 生  
團服へニキビの顔もたのもし  
同 生  
大粒のニキビ男性的に見え  
同 生  
お百度のやうに鏡へ立つニキビ  
同 生  
ニキビの芯へ方程式はほつとかれ  
同 生  
ニキビまで魅力になつて眼に残り  
同 生  
おちよやんのニキビ話題になる座敷  
同 生  
ニキビあちこち戀もあちこち  
同 生  
鏡外だ豆腐賣り爺トボくくと  
同 生  
天才の片鱗がある左利き  
同 生  
愛國の切手を貼つた無心狀  
同 生  
雷に話の腰を折られたり  
同 生  
トラツクに國防婦人も詰め込まれ  
同 生  
妻は千人針、こつちは書く力  
同 生  
恩にきますと女いつてらし  
同 生  
西瓜の種おなかへつけてたのもし  
同 生  
鏡外へ不甲斐なく見る我がベツト  
同 生  
繕持つて將軍いと閉かななり  
同 生  
附添の寝息起して見たくなら  
同 生  
熱帯魚カゴセに似たる奴らゐる  
同 生

出征兵ビルの窓でも歡呼わき  
浩 一  
歡送へ興奮して尺足らず  
浩 一  
腰のもの早や敵を呑む意氣を見せ  
同 一  
エスカレーター人間が湧くやうである  
同 一  
豊富のセーフは蛸が這ふ如し  
同 一  
結論を父は金だと信じ切り  
同 一  
軍人が好きでたまらぬ兒を亡くし  
同 一  
人形のやうな綺麗な理智もなし  
同 一  
屋根裏にゐるこなたは隠しさき  
同 一  
歸朝路を國の非常時船で知り  
同 一  
幾時着の無電をうけた御留守宅  
同 一  
歸朝して妻子の顔へちと慌て  
同 一  
天じよが低いと新歸朝  
同 一  
西洋と比較にならぬ例をひき  
同 一  
支那なんぞから歸朝とばてれくさし  
同 一  
歸朝談何やらだまされるやうだ  
同 一  
新歸朝痛いとこるを感づかれ  
同 一  
ステツキの振り方が違ふ新歸朝  
同 一  
新歸朝ツキの年々くつて見る  
同 一  
ベルリンの思出をきく川料理  
同 一  
二年半歸朝の髪はバター臭し  
同 一  
歸朝の日妻のニキビが自立つなり  
同 一  
デツキでは妻を捜してゐる歸朝  
同 一  
一度目は誇らしげなる歸朝談  
同 一  
酒の座で訊く歸朝談あてられる  
同 一  
質問も許されて聞く歸朝談  
同 一  
握手だけ上手になつて戻つて來  
同 一  
郵船の荷札も白い靴もち  
同 一  
歸朝して恩師の辭つたバイも聞き  
同 一  
母小さく尊し師朝して見れば  
同 一

歸朝して見れば女房の太りすぎ 路 郎  
歸朝して子の寄りつかぬのらさみし同

翠洋を送るの會 (廣島支那)

七月二十一日 於 葉留路居 濱田久米雄報

別れ、歸る、千人針

何又來るき別れてそれつきり 昇 玉  
別れ行く君へ同志はまるく寄り 紫 浪  
離別してから蚊帳の廣いこと 康津奈  
涙線を斷ち切るやうにテープ切れ 秋 史  
別れ行く友追ふ夏の草いきれ 久米雄  
パステット母が汽車まで提げてやり 同  
別れ道明日の約束して戻り 秋 史  
植木鉢跡をのこした君の影 紫 浪  
しげらくの別れを區切る汽笛鳴る 久米雄  
送別の客は四角に汗を拭き 一 雄  
アルバムに別れた友は笑つてゐ 昇 玉  
思ひ出は君さの別れ汽笛鳴る 葉留路  
肩たいてそれで別れる君と僕 九 天  
玩具箱歸らぬ愚痴も母さして 秋 史  
汗かいて歸れば風鈴鳴つてくれ 九 天  
夕めしの準備の中へ交歸る 久米雄  
故郷の風にうれしい笑が待ち 星 州  
雨だれの音もうれしい歸郷の夜 久米雄  
歸る氣に女をさせた灯がともり 秋 史  
歸る度故郷の街は變つてゐ 至 宏  
他家の子を歸して母は膝を出し 秋 天  
凱旋へ歸りトマトをうまうま喰ひ 九 史  
凱旋の子の歸るのを老母は待ち 葉留路

もう歸る時分西瓜も冷へてゐる 昇 玉  
故郷の山國の匂ひで暮れてくれ 九 天  
故郷が近い夜汽車のひどく混み 久米雄  
千人針軍部の眞晝を立ちつくし 九 天  
皆無事で歸れと千人針の聲 昇 玉  
急ぐ足止めて千人針へ立ち 天 作  
千人針死線を越えた肌に染み 秋 史  
まごころの姿千人針へ立ち 久米雄  
千人の針の力を手に送り 星 州  
國思ふこころ千人針の列 久米雄  
日本に生れ千人針を縫ひ 九 天  
千人針残り一針母を縫ひ 香 月  
國の爲盡くせと千人針が着き 昇 玉  
赤心の表れ千人針となり 葉留路

川 今治支部句會 (今治)

九月八日 (貯蓄銀行支店) 月原宵明報

自嘲の蔭(蔭)女月主 本名 曉 童  
秋曇く蔭に悪夢のつゞくなり 同 童  
空襲の夢ばかりみる蔭介石 宵 明  
愛妾も日々冷やかくと蔭は知る 同 童  
蔭ある日面會謝絶言ひ出せり 曉 童  
蔭介石手足を赤に踊らされ 向上庵  
日本なら蔭介石は佐官級 文 庫  
傾いた蔭政權へ虫が啼く 宵 明  
電線の危いさこへ不時着し 香 方  
この春の風の哀れや高壓線 向上庵  
電線の唸る真下で畑を打ち 心 府  
電線の影をレールに汽車ゴツコ 向上庵

落下傘高壓線を真下にみ 香 方  
秋の月電線二本つゞくなり 宵 明  
女戸主獅子で半月位喰ひ 曉 童  
女戸主一番風呂へ這入るなり 宵 明  
標札は昔のまゝで女戸主 文 庫  
女戸主交に似た子をもちあまし 宵 明  
叱られた頃なつかしい女戸主 香 方  
納税は自らがゆく女戸主 香 方  
本名で呼ばず呼ばれぬ友が寄り 香 方  
本名を言へばさほどの顔でなし 香 方  
本名を忘れられた顔で儲ける 曉 童  
本名で女給故郷へ頻り書く 文 庫  
臨檢の本名も出た社會面 向上庵  
堅氣に成つて本名にかへるなり 曉 童  
本名は位碑になつてから知られ 香 方  
會計で呼ぶ本名へうっかりし 心 府  
宿帳に本名一字使はれる 文 庫  
質札に書いてあるのが本當の名 曉 童

川 鶴町支部句會 (大阪)

七月十七日 於鶴町市電運輪事務所 榎上 加藤ライト報

千人針、宿直、夏祭、運刻、案内  
階級を越へて千人針の針 小柳子  
眞心をこめて千人針を縫ひ よしみ  
千人針持つて母親驛へ行き まさ夫  
ハイヒール千人針へ素通りし 寛 柳  
迷信にさせぬ結んで居 岩 石  
千人針一つを固く結んで居 まさ夫  
千人針近所の人さききに縫ひ







編 輯 縱 横

▼句の秋が来たのに――  
我が社では病人が絶えない。編輯部では二人も寝てゐる私自身もまだ手の痛みが充分にとれない。そんなこんなで豫想外の遅刊をしてしまった。まだかくの電話のベルがしきりに鳴る。お詫びの係に蔑乃があたる。今日も又うれしく小言きく日でもある。

▼その代りさ云つてはナト變だが、編輯にはウシと力を入れた組んでは崩し、組んでは崩し、三度も組み換へた。従来よりは少しく贅澤な組み方をして新味を出したので止むなく次號へ割愛した原稿も尠くなかつた。その點は諒されたい。

▼本號は豫告通り「武玉川新研究號」として刊行した。「武玉研究」を毎號掲載しつつある本誌が更に「武玉川」の句釋以外の研究を併せ發表し得たことは頗ぶる有意義と信ずるに共に、川村花菱、梅本秋農屋、森東魚三權威の執筆に深甚の謝意を表す。

▼「川柳塔」を一段に組み「柳界展望」を本號から川・協の頁へ移すことにした。内容の取扱ひ方についても、少し考へて見たいと思つてゐる。

▼長零子氏の「秋蛙鳴く」は頗ぶる氣の利いたもの、高尾亮雄氏の「桃太郎繪巻探し」は信濃邊の桃太郎通の尻がムズ／＼する一文だ。雜文も相當鬼つてゐるが無保證誌としてどうかと思ふも

食亭とんが  
湖月  
本店  
お地はまき亭内

のもあつたので次號へ送つた。  
社 告  
▲川柳雜誌社事務所を十月二十五日左記へ開設した。當分は午後出勤、附近へお越しの節はお立寄りを乞ふ。郵便物は従來通

川・雜・案・内

大體活字十四字、三行金五十錢、一行増すこと  
改題、官印、句案内、柳會廣告、その他

「川柳雜誌」への投句は構形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

川・雜・句・箋

御申込は川柳雜誌社へ  
八十枚綴 一冊 金十五錢  
二冊 金廿五錢  
御申込は川柳雜誌社へ  
切手代用も可

染筆頒布

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の特價で頒布致します  
軸箱入 二十圓・額 二十圓  
小物 五圓・短冊 三圓  
御申込は前金で川柳雜誌行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本自第二卷至第十一卷 各金壹圓五十錢  
第十二卷及第十三卷 金參圓  
送料大阪市内 一冊六錢  
市外 一冊七錢  
御申込は前金で川柳雜誌社へ

残本分讓

川柳雜誌の残本分讓申上ます  
第二卷より第十二卷迄 一冊十錢  
第十三卷 一冊 十五錢  
御申込は前金で川柳雜誌社へ

轉 居

海近き南海沿線諏訪の森へ轉住することになり  
ました御寸暇の節にはお立寄下さい

大阪府下濱寺町大字下石津八五  
山 本 雨 迷  
電話濱寺二一九六番

り本社宛に願ひ度し。

西區土佐堀筑前橋電停前

電話土佐堀三三三三

▼福田山南樓君が十月二十七日

頃に来阪する筈だ。それを機会に不朽洞會を開きたいと思つてゐる。

▼生田翠夢君が家事の都合で一

旅支部同人として、又川柳人協會評議員として相變らず川柳のために精進されたことになつた。▼川・維今治支部の幹事、月原宵明君が應召された。曉童、心府の兩君からの知らせがあつたので「上海か北支か君にかかると」凱旋を待つて打電した。從つて支部の幹事は渡邊曉童君が更迭することになつた。

# 川柳 十一月例會 雜誌社

夜六時半

# 6

十一月

會場 誓得寺(電南四八八六) 大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

兼題 「娘ごころ」 三句 路 郎 選

兼題 「船」 三句 艸 樂 選

柳話 麻 生 路 郎

會費 二〇錢(川協會員章提示の方は一五錢)

呈賞 兼題 天位に粗品を呈す(出席者に限る)

乞鉛筆持參

## 川柳雜誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九  
幹事 綠雨、結美、戀人、青兒、里十九

「後の蜜柳」を頒つ楨形四頁三部十錢、切手代用二錢五枚

川柳雜誌社宛  
「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて譲受けたし  
川柳雜誌社内 B 生

肖像 畫 揮毫希望の方郵券四錢申込詳細  
大阪柏原 小川泰廣  
送る 像畫院支部主任 殿名諭吉

化粧懸賞川柳  
新聞社  
課題「軍歌」十一月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)選者麻生路郎氏秀逸數句二蒲謝を呈す大阪西成區玉出本通三麻生路郎氏宛

十錢スタンド

開業御挨拶

このたびは實弟應召の名譽に接しましたのでその營業を管理し承りましたことになりました。こゝに十數年來の私どもの禁酒主義を全くと相反しました。和洋主義茶、名物串やき料理の和洋錢スタンドを演速區大國町交又點西南角に經營いたさねばならぬことになり來る十月八日より開業いたします。氣易い少おな寄のお休み所として是非お立寄の上お茶なりさ御笑味下さいませ。  
脇田梅子

川柳を作る人愛好する人の必讀誌毎月一日發行一部廿錢送料一錢

### 川柳俱樂部

東京市牛込區揚場町八  
川柳俱樂部社

### 川柳草薙

東海の代表誌  
一部一〇錢一年一圓(郵稅共)  
名古屋市南區八熊町  
寺田一一五〇  
發行所 草薙川柳社

### 川柳きやり

菊判每號七十數頁  
毎月一日發行一部廿五錢  
東京豊島區高田本町二ノ一四  
六八  
川柳きやり社

### 京

一部十錢 一年一圓  
京都市西木屋町四條下ル  
發行所 京都川柳社

### 川柳みちのく

一部十五錢一年一圓五十錢  
青森縣黒石町  
發行所 川柳みちのく吟社

# 々人の係關社

(順はろい)

不  
朽  
洞  
會  
員  
橋本綠雨  
高橋かほる  
福田雨樓  
西田山雨  
永田里十  
★本丹路

吉市村姬朝水北岩  
田塙松田田谷山崎  
水没松夕新結恬柳  
車食夢夕鐘水美郎路  
宮後西松春須大妹  
岡藤下元崎崎尾  
白青い小紀豆八變  
峰兒を子太秋歩人  
鳥加近江原大中西石  
生藤藤戸月鶴西曾  
古ライみつ史喜お根  
弗ト勇る風由む民耶



## 川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

長長長田嘉笠片岡大長池  
野岡崎中納原岡本道谷澤  
晴半柳辰路直一弘川樂  
濱太郎秀二純生方平雄徹  
客  
員  
沖鳥伊末淺赤穎藤藤國  
野山藤弘弘田井原本村枝  
岩一彦太殿殿井清退之史  
三步造 耶 耶 耶 耶 耶 耶  
高生谷田米川川龜小大大大  
尾方脇村村村上井井西西島  
亮敏索之入花三井長五濤  
雄郎文介馬菱太太武郎村明  
森小林藤蛭篠柴食前前安窪  
東不里子原谷谷滿田田川田  
瀝好省春宰南五五雀雀留銀  
魚人古二耶耶北健健郎美樓

### 事 幹 と 部 支

道頓堀支部(大阪市)  
九三會支部(大阪市)  
函館支部(函館市)  
高知支部(高知市)  
梅田支部(大阪市)  
田邊支部(和歌山)  
鏡川支部(島根縣)  
松山支部(松山市)  
鳥取支部(鳥取市)  
松山支部(松山市)  
御旅支部(松山市)  
天王寺支部(大阪市)  
鶴町支部(大阪市)  
御池橋支部(大阪市)  
松江支部(松江市)  
大鐵局支部(大阪市)  
西條支部(愛媛縣)  
今里支部(大阪市)  
今治支部(今治市)  
光笑會(大阪市)  
伯耆支部(鳥取縣)  
竹原支部(廣島縣)  
十三支部(廣島縣)  
臺中支部(臺南市)  
兵庫支部(神戶市)  
廣島支部(廣島市)  
名古屋支部(名古屋市)  
庄萬よし  
北山悟郎  
龜井辰修  
水谷春水  
國澤美  
辻左馬  
尼綠之助  
中島鐵州  
江井みづる  
酒井つる  
須崎白豆  
宮岡白秋  
西谷川兒  
勝山喜山  
山本賀夫  
荒井英賀  
竹内機見  
市邊食子  
渡邊曉童  
永田里九  
三鴨美笑  
松井可笑  
宮内耕作  
三崎陽幸  
濱田久幸  
吉田水車

# 投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく陪書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封封入の事。

# 募 集

## 第十四卷第十二號課題

十月卅日締切

(十句以内)

工 事 森 東 魚 選  
支 店 村 松 夢 裡 選

## 第十五卷第十一號課題

十一月廿日締切

(十句以内)

日の出 前 田 五 健 選  
パイプ 市場 没 食 子 選

## 每 號 募 集

近作柳樽(昔吟) 麻 生 路 郎 選  
各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

## 定 價

一 部 金三十錢  
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢  
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

## 廣 告 料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けませす○御注文には何月號よりま御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年九月廿五日印刷  
昭和十二年十月一日發行

第十四卷 第十號  
(毎月一回一日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地  
編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

# 川 柳 雜 誌 社

發行所 電話天下茶屋二五七九番  
振替 大阪七五〇五〇番

無 禁 斷 轉 載  
支 社 東京市蒲田町女塚町二〇三  
支 社 川柳雜誌社東京支社

## 賣 捌 店

(大阪)大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 朝日ビル書店  
其他 市内各書店(東京)かん東京堂 かん藤松堂 とう吉岡書店  
あさ玉森堂 紀伊國屋 三味堂(神戸) 米田寶文館(函館)  
石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂



美髪は  
紳士道！

御使用後ごても  
スマートな灰皿  
になる新案容器！

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ  
明らかな青年美を創る伊豆椿ポマード

頭髮のホルモン劑（コレステロール配合）

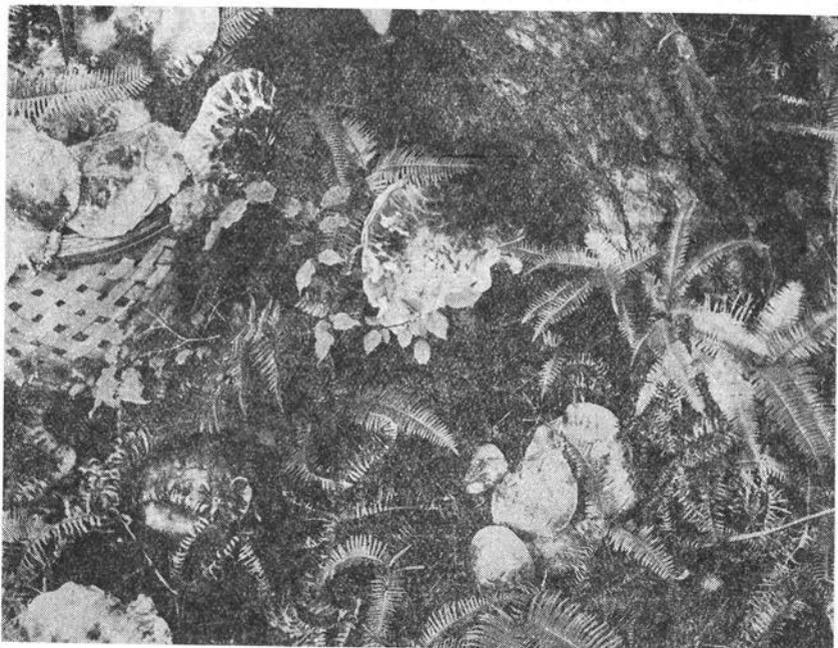
# 伊豆椿 灰皿ポマード

植物性 五十銭



全國百貨店、有名化粧品店  
薬店、小間物店にあり

伊豆椿香油本舗  
大槻彩芳園



い句面で軽手お

# 探ヶタツマ



き開山日七月十

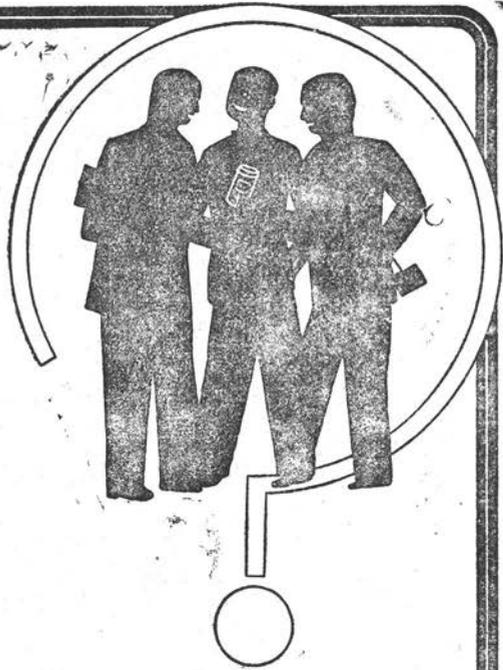
指定山四十數ヶ所  
山の定食

(すき焼)  
松茸飯付) 九十銭

山の定食付

割引往復乗車券發賣

大鐵電車 橋のべあ



# 胃酸過多症

胃痛、惡醉

二日酔、溜飲

酒・煙草のみすぎ

# 制酸鎮痛劑

# ノルモザン錠

ノルモザン錠は、珪酸アルミニウム（醫家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎮痛の効果を併有する學理的製劑です。

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺戟を去り、胃酸の過剰分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎮め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミツ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます。

【價格】 一日分（三錠） 三日分（五〇錠） 約一週間分（一四四）

十六日分（二四） 一ヶ月分（三〇五〇） 二ヶ月分（五四〇）

各地藥店にあり

發賣元 大阪市道修町 株式會社 武田長兵衛商店

# 菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和十三年九月二十五日印刷  
昭和十三年十月一日発行

川柳雜誌

(第一六五號)

定價金參拾錢

送料壹錢

# の秋な朗明 實充貨百

御買物は高麗橋  
良品の三越へ



大阪 | 三越 | 高麗橋

